

科目「ビジネス基礎」における指導と評価について ～自ら学び自ら考える力を育てる授業の充実をめざして～

岡山県立津山商業高等学校 ビジネス基礎研究チーム

小林 通浩・坂本 光潤・岸本 弘・松田 こずえ・藤原 真実・小津野 純

1. はじめに

小学校・中学校で既に平成14年度から実施されている新学習指導要領が平成15年度より高等学校でも学年進行で順次施行される。このように新学習指導要領の実施ばかりでなく、生徒指導要録の改善、それにとまなう「目標に準拠した評価（絶対評価）」の一層の重視、及び小・中・高等学校を通じた評定において「目標に準拠した評価」及び「個人内評価（児童生徒のよい点や可能性、進歩の状況などを評価する）」へと評価のあり方が変わった。

しかし、現時点における各学校の取り組みの状況や教員の反応は、大混乱しているという表現は言い過ぎであろうか。本校は、平成14・15年度に、「評価規準、評価方法の工夫改善に関する研究」の研究指定校となり、早くから評価のあり方を研究してきた。科目「ビジネス基礎」においては、比較的順調にスタートし、試行錯誤しながらも奮闘中である。

2. 新しい評価の取り組みのテーマ

本校ビジネス基礎研究チームが新しい評価システムを構築する際に、最も重視した事柄は、『画一的な授業展開と受動的な学習スタイルから、自ら学び自ら考える力を育てる能動的な授業の充実と、将来のスペシャリストとして物事をクリエイトすることに長けた人材の育成』である。

3. 指導目標を明確に

目標に準拠した評価とは、あらかじめ設定された学習目標に照らして、各生徒が、どの程度の実現状況にあるかを示す評価のやり方である。すなわち、目標に準拠した評価を適

切に行うためには、まず指導目標を明確にすることからはじまる。学習指導要領に示されている科目の目標やその解説書にある内容の範囲や程度も考慮しながら、各学校生徒の実態を勘案し、指導目標を明確にする。

4. 評価規準の策定

評価規準とは目標の実現状況を判断するためのよりどころを意味するものである。具体的には、目標実現状況に対する分析的な判定事項である。

表1

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
内容のまとまり の 評価規準	ビジネスと流通活動のかかわりに関心をもち、経済活動における流通の経済的特質やその担い手である企業及びビジネスの担当者について、調べたりまとめたりしようとする。	流通活動の特徴やその担い手である企業について、様々な角度から主体的かつ客観的に考察するとともに、流通活動の諸問題の因果関係や相互関係をとらえている。	流通活動に関する様々な資料を適切に選択して活用し、ビジネスと流通活動とのかかわりについて客観的に把握するとともに、その過程や結果を有効な方法で的確に表現する。	ビジネスと流通活動に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、流通の意義や役割及びビジネスの担当者の活動の概要を理解している。
単元または 題材の 評価規準	・流通に関するビジネスの担当者に関心をもち、その活動の概要について、調べたり、まとめたりしようとする。	・流通に関するビジネスの担当者について、様々な角度から主体的かつ客観的に考察するとともに、その活動の概要をとらえている。	・流通に関するビジネスの担当者に関する様々な資料を適切に選択して活用し、その活動の概要を客観的に把握するとともに、その過程や結果を具体的に説明する。	・流通に関するビジネスの担当者について基礎的・基本的な知識を身に付け、その活動の概要を理解している。
単位時間における 具体的 評価規準	①流通に関するビジネスの各担当者に関心をもち、生徒の身近な事例と比較しようとしている。 ②流通に関するビジネスの各担当者の活動の概要や動向について調べたり、まとめたりしようとしている。 ③自他のグループの発表を身近な事例と比較しながら考えようとしている。	①流通に関するビジネスの各担当者について、生徒の身近な事例と比較し、その活動の概要や関連性を考察することができる。 ②流通に関するビジネスの各担当者について、その役割や仕事の概要を考察することができる。 ③流通に関するビジネスの各担当者について、今後の動向等を多面的、多角的に考察することができる。	①流通に関するビジネスの各担当者について様々な資料を収集し、その結果を適切にまとめることができる。 ②流通に関するビジネスの担当者や、生徒の身近な事例と比較し、その結果を適切に表現することができる。	①流通に関するビジネスの各担当者について、その活動の概要を理解するとともに基礎的・基本的な知識を身に付けている。 ②流通に関するビジネスの各担当者について相互の関連性を理解し、その知識を身に付けている。

評価規準の作成にあたって、以下の5つの点に留意した。

- ① 自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含めて、児童生徒の学習状況を適切に評価できるようにする。
- ② 指導に生かす評価を充実させる（指導と評価の一体化）。
- ③ 教員にとって過大な負担とならず、評価の改善に生かすことができるようにする。
- ④ 学校における評価の研究や実践の成果を生かす。

- ⑤ 評価規準やシラバスが、生徒や保護者にとっても理解しやすい表現になるようにする。

表1は、昨年度実施した単元名「ビジネスと流通活動 エ ビジネスの担当者」のものである。

5. 指導と評価の計画

表2は、昨年度実施した単元名「ビジネスと流通活動 エ ビジネスの担当者」の一部を抜粋したものである。

研究実施した結果、表2による授業実践は評価の回数が多く、評価に追われる傾向にあるので、今年度は昨年度の経験を生かし、改善していきたい。

1) 評価の観点が表出する授業に改善

学習評価を改善するには、授業の改善を先行するように留意した。授業が内発的学習意欲や創造能力を引き出すものになっていなければ、それらの学力が教師の目にとまらないと考えたからである。すなわち、教師が一方向的に講義して終わる知識詰め込み型の授業であれば評価の観点は表出しない。評価の観点が表出しない授業であれば、観点別の評価はやりようがないということにある。何よりも、生徒の能動的な学習活動を授業の中で保証する必要がある。自らの意図や計画に基づいて活動できる場があり、そこでは自己責任での学習が進行するような授業を求めた。

(成果)

- 班別活動による調査・発表など、生徒の主体的な活動を重視する授業展開になった。
- 科目担当者間のコミュニケーションが密になり、指導の流れとノウハウを共有化することができ、教授者による個人差が少なくなった。

(課題)

- 年間指導計画は、かなりゆとりを持たせておく必要がある。指導計画とシラバス、授業と実際との整合性を保つことが困難である。
- 教授者の「個性」が薄れてしまう。
- 教授者自身の意識改革が必要である。

2) 評価に追われない授業をめざして

評価活動が煩雑で評価に追われるような授業

表2

時間	ねらい・学習活動	単元(又は題材)の評価規準との関連	評価方法等
1次 (3時間扱い)	○ねらい 流通に関するビジネスの各担当者に興味を持ち、その業務内容に興味を抱かせる。 ・前時に予告し、生徒の身近にある商品について、その商品が流通するために必要なビジネスの担当者をあげ、それらがどのような業務を担当するかを調査し、ワークシート1に個々に記入し提出する。 ・グループ毎に、上記ワークシートを個々に発表させ、その中から1つの題材を選びクラスでの発表の準備をする。	アー①	・ワークシート1の記入内容を事後に確認する。 (関心・意欲)
	・流通に関するビジネスの各担当者について、グループごとに発表する。	アー②	・課題を追求するために情報収集や編集に意欲的に取り組んでいるか、行動観察を行う。 (関心・意欲・態度)
	・グループごとに発表した後、意見や質問を出し、討議する。	ウー① アー③ ウー②	・流通に関するビジネスの各担当者の様々な資料を適切に選択して活用し、その結果を適切に表現しているか、発表用にまとめた資料の内容で事後に分析する。 (技能・表現) ・流通に関するビジネスの各担当者の様々な資料を適切に選択して活用し、その結果を適切に表現しているか、発表を観察するとともに、自己評価及び相互評価を記入させ事後に確認する。 また、発表後の討議の中で、流通に関するビジネスの各担当者の役割や概要を客観的に把握したうえで、自分なりの意見をまとめ発表しているか行動観察を行う。 (意欲・態度) (技能・表現)
2次 (1時間扱い)	○ねらい 身近な事例を取り上げて、生産者の活動の概要について理解させる。 ・私たちの経済生活にあって生産者のビジネスがどのように流通とかわりを持っているか身近な事例を取り上げて理解させる。 < 省 略 >	イー①	・地域の製造品出荷額等の推移の資料から、我国の産業構造の変化を主体的かつ客観的に考察しようとしているか、ワークシート2を記入させ事後に確認する。 (思考・判断)

にならないように留意した。本校の研究では、課題提出による評価をおもな評価方法とした。しかし、昨年度は研究指定校ということで、暗中模索のなか観点別評価を実施したが、新しい評価システムを構築しようとするほど、評価の回数が多くなる傾向になり、失敗を繰り返した。

(成果)

- 課題提出後、科目担当者で協議することにより、比較的客観的な評価ができた。
- 項目ごとの各観点の評価は、各単元にそれぞれ1回程度が限度と感じた。

(課題)

- 評価の回数が多い。観点別評価を、毎時間導入することは評価活動に追われることになり、授業自体がスムーズに運ばなくなる。

3) 客観的な評価をめざして

本校の研究では、行動観察による評価を極力少なくし、提出物など事後に確認することで観点別評価を取り入れることにした。確かに、行動観察による評価も手段ではあるが、教員の主観が先行し、評価の客観性や信憑性に欠ける懸念があると考えたからである。

(成果)

- 評定の根拠について、保護者・生徒から要求があれば、明確に説明する用意ができています。
- 同じ形式で、同じ観点に対応したワークシートを使用するので、評価が具体的に確認でき、生徒個人の内部で、伸長度が自覚できる。

表3

ビジネスの担当者 ワークシート2		組 番 氏名
1 生産者のビジネス		
生産者の種類は教科書を参照しなさい。 津山市の製造品出荷額の推移をみて、どのような特徴がみられますか。 (思考・判断)		
1		
2		
3		
津山市の製造品出荷額の推移をみて、どのような特徴がみられますか。 (思考・判断)		
<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>		
<p>※ ここに津山市の製造品出荷額の推移のグラフを示してある。</p>		
〈 省 略 〉		

(課題)

- ワークシートの増加にともない、作成と評価に追われ多忙化が見られた。昨年度は「ビジネス基礎」だけの評価でよかったが、今年度から「簿記」「情報処理」の観点別評価も加わり、複数科目の担当者は、多忙を極める。

表3は、表2の指導と評価の計画にあるワークシート2である。肝心なのは、この課題でどの観点の評価しているのかを認識させることである。これはワークシートに関わらず、すべての評価活動において、事前に知らしめる必要があると考える。

6. 年間指導計画とシラバスの作成

信頼性のない評価は意味をなさない。生徒、教師、保護者等の関係者のなかで、評価規準や評価方法、年間指導計画や学習目標等について、事前に十分意思疎通ができていなければならない。本校では、入学式の際に年間指導計画に評価規準を取り入れた全科目のシラバスを配布し、その概略を説明することでアカウントビリィティ（説明責任）を果たすよう努力している。

しかし、冒頭にも述べたように、新しい評価システムの構築に関して、本校教員も大混乱している。したがって、入学式で説明したシラバスのとおりに授業が進んでいない科目も正直言っている。今年度に限り、観点別評価を総括した絶対評価が定着するまでは仕方ないのかもしれない。これは、新しい評価システムを開発することにより起きてきている我々教員の葛藤である。指導と評価は別物ではなく、生徒を評価することで、授業の問題点に気づき、授業改善に向けて努力を行っている結果がこのような状況になっている。年度当初に出来上がったシラバスは、日を追うごとに充実している。勿論、機会あるごとに生徒、保護者にシラバスの変更点を伝え、理解を求めているところでもある。

【シラバスの内容】（生徒・保護者に示したもの）

- 科目名 ○単位数 ○授業担当者
- 授業形態 ○使用教材 ○科目の意義
- 科目の目標 ○科目の評価の観点の趣旨
- 学習の進め方について ○学期ごとの課題、提出物について ○評価の方法について
- 年間授業計画（学習目標、評価の観点を明示）

【年間指導計画の内容】

- 実施月 ○単元名及び時数 ○単元の目標

- 評価の観点及びその評価規準 ○評価方法
- 学習活動（指導内容） ○教材
- 他教科・他科目との関わり

年間指導計画については、単元と横並びに学習活動（指導内容）と評価規準及び評価方法が記載されているものが、表2よりも活用しやすい感想を持っている。観点別評価を意識して教材を作成したり、授業計画をする際に便利である。

7. 評価方法について

評価方法には、行動観察、作品法、質問紙法、自己評価法・相互評価法、テスト法、面接法、口頭試問（発問）、ポートフォリオ法等があるが、それぞれのメリットとデメリットがあり、指導と評価を計画する際には、様々な角度から検討することが必要である。

昨年度及び本年度1学期の評価方法は、評価の客観性を重視する観点から、ワークシートを提出させ、事後に評価する質問紙法を導入した。昨年度はビジネス基礎だけの研究でスムーズに評価することができた。しかし、本年度から「簿記」、「情報処理」も観点別評価が導入された関係で、複数科目を担当する教授者の机上には、提出された評価物が山積し、評価に追われ、観点別評価に対する意欲さえ失せてしまいそうにもなった。学年が進行して、全学年が観点別評価を実施する（本年度は1年生のみ実施）ときのことを想像すると恐ろしいものがある。このようにワークシートなどの質問紙法で観点別評価を実施するときは、その回数や内容を精選しなければならない。

行動観察による関心・意欲・態度の評価は非常に難しい。これは大人しい生徒は意欲が表面に出にくいなど、個人の性格に左右される面があるからである。また、授業中に生徒の行動観察を頻繁に行うことは、授業の進行に支障をきたすと思われる。このデメリットを克服し、全体をていねいに評価するためには、TTの導入や小人数クラスが望ましいと考える。

口頭試問（発問）は容易に評価機会を得ることができるが、発問の難易度に差があるために、一律に

評価できない。

テストは、知識・理解を評価するには有為であることはいうまでもないが、問題の内容によっては、他の観点を評価することにもなり得る。

8. プロジェクト学習とデジタルポートフォリオ評価法

昨年度まで、夏季休業中の課題として、「調べ学習」を行ってきた。しかし、我々は、「調べ学習」では生徒に生きる力を育成するには物足らないと考え、今年度からプロジェクト学習に切り替えた。

本年度、文部科学省から教育情報共有化促進モデル事業の研究指定を受け、デジタルポートフォリオ評価法を研究開発中である。これは、プロジェクト学習でおこなわれる情報リサーチやフィールドワークなどは、教員の観察評価が困難であるが、生徒自身がビデオ撮影及びビデオ編集を手掛け、教員が事後に評価しようとするものである。本研究においては、プロジェクト学習の年間指導計画、指導案、ワークシート、関連文書、学習日誌、教務手帳、簡単動画編集講座等のモデルを開発し、インターネット上にデジタルコンテンツとして公開する予定である。

9. おわりに

『商業教育は人づくり』とよく言われるが、いまこそ評価システムを変えることによって『画一と受身から自立と創造へ』向けて前進し、自ら学び自ら考える力を育くみ、将来のスペシャリストとして、ものごとをクリエイトすることに長けた人材（起業家教育にもつながる）の育成をはかっていく時なのではないかと考える。（文責：小林通浩）